

第1節

## 久知河内集落の概要

### 【概要】

久知河内集落は、二級河川久知川両岸沿いに位置する30戸弱の小集落である。この集落も佐渡島内の人口動態と同様に、人口減少と高齢化が進行し、集落機能をいかに維持し、持続可能なものにするかという課題に直面している。また、久知河内集落には日本の多くの地域でみられたように、高度経済成長期の頃まで久知川の水環境と深く関わる生活があった。久知川は生活の場であり、憩いの場でもあった。しかし、生活様式の変化や上水道設備の整備、洪水対策等による護岸工事によって、川との密接な関わりはいつしか希薄なものとなっていく。本節では、その姿を概観する。

### 【ねらい】

本節では、地域の自然環境保全とそれを生かした地域づくりに取り組む久知河内集落の概要について紹介することがねらいである。このために、まず久知河内集落の位置、規模を概観する。次に、かつて川は人々が集い・遊び、生活に利用する存在であったことを描き出す。久知河内集落で暮らす人々にとって、かつて集落を流れる久知川がいかに生活と密着していたか、それが何故疎遠な関係になっていったのかを理解することをねらいとする。

## 1. なぜ、久知河内集落を事例に取り上げるのか

東京・大阪・名古屋の三大都市圏の人口が、日本の全人口の半数を超えたことが明らかとなった(2007年7月新聞報道)。大都市圏への極度の人口集中と地方、僻村の過疎・空洞化というアンバランスを抱えつつ、少子・高齢化そして人口減少化が、21世紀日本社会の直面する現実となりつつある。すでに高齢化・過疎化している地域にとっては、集落の機能をいかに持続可能なものに維持するかが緊急の課題であり、その課題解決はこれからの日本社会の先進的モデルにもなり得るものである。久知河

内集落に暮らす人々は、村落を貫流する久知川とその流域の自然環境との関わりの中から、持続可能な地域環境、持続可能な地域づくりに努力している。

久知河内村落の持続可能な地域づくりの特徴は、環境資源の二つの側面への着目にある。ひとつは環境保全活動であり、もうひとつはそれらを生活・経済活動とリンクさせる取り組みである。高齢化・過疎化する集落にとって、地域の生態系・自然環境保全活動のみで、持続可能な地域づくりを達成するのは難しい。なぜなら、高齢化・過疎化の進行する中では、地域の生態系・自然環境保全活動は、村落の維持—その地で暮らし働き生計を維持し、それによって村落機能を維持する方策—とセットとなった

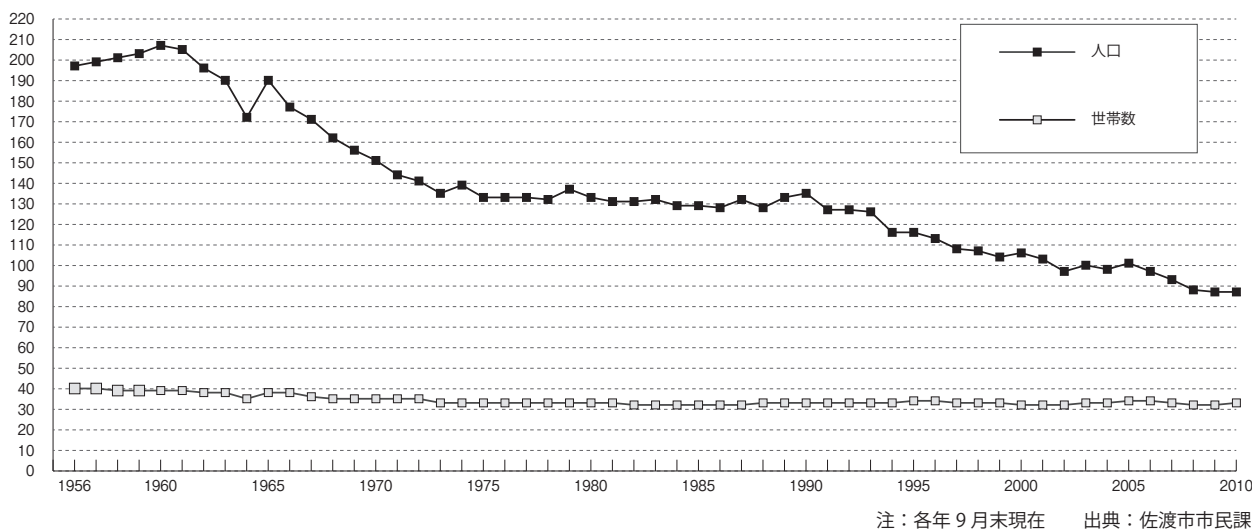


図1 久知河内地区の人口と世帯数の推移 (1956～2010年)

形で取り組むことが不可欠である。高齢化・過疎化する村落の維持と生態系・自然環境保全の二つの側面を視野に入れることで、持続可能な地域づくりは実現可能なものとなるだろう。それには、村落内部の組織づくりと外部の組織や人、行政との連携が鍵となる。

## 2. 持続可能性をキーワードにした環境教育

近年、環境教育は「持続可能な発展のための教育 (education for sustainable development)」という、より広い教育目的の中に位置づけられるようになってきた。「持続可能性 (sustainability)」をキーワードに、地域の住民が行政や市民と連携・協働して、流域の自然環境保全活動とその自然環境を資源とした地域づくりに取り組んでいる久知河内集落の事例を紹介する。高齢化・過疎化が進行しているこの地域にとって、持続可能性は自然環境の保全と集落機能・生活の維持と不可分な関係の中で追求されている。その取り組みは、これからの日本社会の持続可能な地域社会づくりの可能性と課題を考える手がかりにもなる。

	戸数 (戸)	人口 (人)		
		全人口	高校生以下の人口	65歳以上の人口
2003年	27	97	16	44
2007年	27	85	8	40

表1 近年の久知河内集落の戸数・人口

本章で扱う久知河内集落は、そのひとつのモデルを示しており、環境に配慮した持続可能な地域づくりの可能性と課題を学ぶのに適した事例なのである。

## 3. 久知河内村落の概要 —人口減少と高齢化の進行—

旧両津市大字久知河内は、両津港から車で東に15分ほどの場所にあり、両津湾に注ぐ二級河川、久知川両岸沿いに約400mにわたって列状に並ぶ集落である。

『両津市誌 上巻』(1987年)や『日本歴史地名体系 15 新潟県の地名』(平凡社, 1986年)等によれば、久知河内集落は中世期に村の中心部にある長安寺の寺域内に成立した村であるといわれている。

久知河内集落の人口は、今から120年ほど前の明治中期頃には戸数37戸、人口149人を数えたとい



写真1 久知河内集落を下流から望む

えられている（聞き取りより）。しかし、近年は人口減少が顕著で、とくに若年層の減少が大きい。

高度経済成長期以降55年間の「久知河内地区の人口と世帯数の推移」（図1 [206ページ]）から、幾つの特徴が読み取れる。まず、久知河内集落の人口は1960年の202人をピークに大きく減少していることである。70年代から80年代の時期には減少傾向に一時歯止めがかかるが、それ以降は再び減少に転じ、2000年前後に100人を下回るようになり、2010年には82人まで減少している。ピーク時の2分の1以下である。

他方、この間の世帯数の推移は微減傾向にとどまっていることである。1956～57年の35世帯をピークに2010年には28世帯となっているが、1970年代以降の過去40年間はほぼ27～28世帯を維持し推移している。このことは、世帯規模の顕著な縮小に繋がっている。ピーク時の1960年の平均世帯規模は5.94人であったが、2010年には2.93人にまで減少している。おそらく、若年層が進学や就職を契機に他出し、地区外ないし島外に生活基盤を築き戻らなかったため、地区内は夫婦世帯になってきたからではないか、と推察される。

更に、若年層の減少と高齢化が近年特に顕著である。2003年7月末と2007年9月末に現地聞き取り調査（表1）を実施した（聞き取り調査時点での世帯数のため、図1の行政統計と若干数値が異なる）。この4年間で久知河内集落の世帯数に変化はみられなかった。しかし、人口は12人も減少していた。中でも高校生以下の就学年齢人口減少が顕著で、4年前の16人から8人に半減し（内訳は小学生4人、中学生2人、高校生2人）、その集落人口に占める

割合は9.4%に過ぎない。一方、65歳以上の高齢者は40人(47%)にも及ぶ。内田健は、今後条件によっては、佐渡市内の「世帯数も急減に転じる可能性が高い」ことを指摘している（80ページ）。高齢化の更なる進行とともに、今後、久知河内でも世帯数の減少が進むことになるかもしれない。

日本社会の人口減少、高齢化が進行している地域では、農業生産活動や集落行事を今後も維持・継続することが可能なのか、集落そのものの持続可能性はあり得るのかという切実な課題に直面している。持続可能な自然環境づくりへの取り組みは、村落機能を持続させるという取り組みを抜きにしては考えられないことがわかる。ここに、久知川を核にした自然環境保全活動を媒介にした地域づくり・生産活動への取り組みがなされる背景がある。

#### 4. 久知川とともにあったかつての久知河内集落の生活

久知河内集落を貫いて久知川が流れている。久知川は村落の上流部で支流の小股川が合流し、河川延長は7.6km、流域面積は14.5km<sup>2</sup>である。これは佐渡島内第6番目の河川延長である。（佐渡市ホームページ、『両津市史』参照）

高度経済成長期の1960年前後頃まで、日本全国の多くの地域で、流域の川や湖沼は人々の生活と密接に結びつき、またなくてはならない水環境として存在していた。例えば嘉田由紀子らの調査によれば、琵琶湖周辺地域では昭和30年代まで、川水や湧き水、井戸などのような自然の水を生活用水として利用していた。

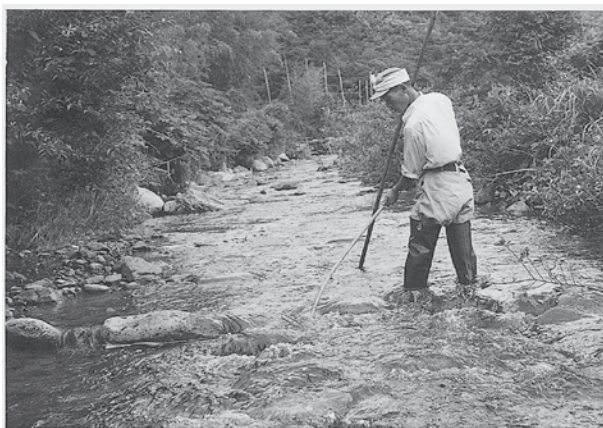


写真2・3 「集落の上流部でタモ（サレ網）を使つての鮎捕り（1960年）」（ともに菊池武治氏提供）

日本の多くの地域に見られた伝統的な川の利用法としては、大きく次の7つがあげられている。(鳥越皓之・嘉田由紀子・陣内秀信・沖大幹編『里川の可能性』新曜社、2006年、11～12頁)

- ①「飲用」・②「洗い」・③「水運」・④「農工用」・
- ⑤「漁労」・⑥「防災」・⑦「遊び」

かつての久知河内集落の人々の生活も、久知川とともにあった。久知川は久知河内集落の人々に重要な生活資源を提供し、地域の人々の生活が展開される場でもあった。ある人は当時の久知川との関わりを次のように振り返っている。(久知河内ホテルの会『昔からずっと、川とともに、久知河内』2003年3月、4頁)

一昭和30年代の久知川は旧態依然として川幅も狭く、堤防もきわめて低かった。従って川への水汲みも石を、3、4段積みば容易に汲み取ることができたのである。川の水は、簡易水道のできるまでは集落民にとってかけがえのない飲料水であった。また、洗濯や野菜等を洗ったり、農耕のための牛馬を川下(集落のはずれ)で洗ったり、または川の水で風呂へ入り体の疲れをいやして明日の労働への糧としたりしたものである。

6月のホテルの最盛期には、菜種の実を採った枝を竹の先に固定し、よくホテル狩りをしたものである。ちょうどこの頃は田植えの季節である。川水が増水すると産卵のためにマスが遡上を始める。年間数百匹にもなろうか。朝方捕りに出て十匹も持って帰る者もいた。

7月になるとアユの解禁となる。漁業権を持たない者は捕ることができなく、これは厳しかった。

夏になれば川の水の流れも細くなり、今度はうなぎ捕りにでたものである。餌はアユを釣り針につけ細竹の先端にこれを取り付け大きな石の穴を探しここへ入れるとよく釣れた。ウグイ、イワナの川釣りもなかなか楽しい遊びであった。餌はブドウのツタの中にある虫、この餌ではよく釣れ体長8寸(約24cm)の大物を手にしたこともある。

他に、久知川の水はかけがえのない貴重な飲料水であった。そのため、川へは一切ゴミや汚



写真4 1957年、久知川に集う久知河内消防団員  
(菊池武治氏提供)

物を捨てないこととし、たい肥等にならないものは、すべて心経橋の下まで持って行き、増水したときこれを流し、集落民個人個人が神経質になるくらい清潔に注意したものである。

飲料水、野菜の洗い、洗濯、風呂水、牛馬の洗い等の用途として、久知川の水は貴重な生活用水であった。上水道が完備するまで、毎朝、川の水を汲んで大きな瓶に入れておき、ゴミを沈殿させる。その瓶の水を柄杓で汲んで飲用に供していた。また、風呂水は天秤棒で桶を担いで久知川から運んだ。

久知川は、また、サクラマス、アユ、ウグイ、イワナ、ウナギ等のタンパク源となる川魚が豊富な川でもあった。サクラマスは、3月の雪解けの増水とともに遡上した。ウナギは8月に漁が見られた。集落の上流部にある二股観音堂の8月17日の例祭では、五穀豊穡を祈願して久知川で捕れたウナギを蒲焼きにして供えるのが習わしとなっていた。

また、8月16日の送り盆では、麦藁でしつらえた船にお供え物をのせ、久知川に流した。このために、子どもたちには川の清掃が一つの役割として与えられていた。子どもたちにとって、久知川は泳ぎや魚とりのための遊び場であったし、年中行事への参加は川をきれいにする共同体の規範意識を学ぶ機会でもあった。

—久知川は私の子供のころからの遊び場、小学校低学年の頃はエビをすくい。ザルを持ち出し、母に怒られる。高学年になるとアユを捕り、アユを餌にしてうなぎを捕る。今は深いところが

なくなったが、昔は深いところがあり、泳いで小魚を手づかみしたものだ……。

これらのさまざまな日常的関わりを通して、人々は川とのつきあい方を生活の中から学んでいったのであろう。それ故に、明文化されてはいないが、集落の人々は、川へゴミを一切捨てないことに「神経質になるくらい清潔に注意した」というのである。共同体の水環境維持を支える、目に見えない暗黙の規範が共有されていたといえる。

では、川づくりはどのようなものだったのだろうか。日常生活に於いて久知川と密接に関わることができたのは、人々が近づきやすい親水的構造になっていたことが挙げられる。

写真4（208ページ）は、1957年（昭和32年）春の久知川の様子である。ポンプ購入記念として久知河内の消防団員が久知川を背景として記念撮影したものである。堤防のつくりを現在のもの（写真1）と比べてみると、違いがよく分かる。護岸は石積みで、堤防の高さは大人の肩よりも低い。また、堤防と民家の庭はほぼ同じ高さであったことがわかる。容易に川に入ることでできる堤防の構造であったし、また、そうでなければ日常生活にとって不可欠な飲料水等を確保することはできなかっただろう。

ときに大雨のために久知川が氾濫し、破堤し水害に遭遇したこともある。川は自然災害をもたらすことがある。1902年（明治35年）の大洪水で集落は大きな被害を受けた。その供養塔が建てられて、今でも7月に女性を中心にして供養が行われている。それでも久知川は、日常生活において飲料水をはじめとする生活用水、水産タンパク源を提供する場、遊びの場として人々の日常生活に密着していた。

## 5. 高度経済成長期：生活の変化とともに川との関わりは疎遠になる

しかし、日本の各地でそうであったように、高度経済成長期に、人々の生活と久知川との距離は徐々に遠くなる。そこには幾つかの要因が挙げられる。

まず、生活様式の変化である。1950年代後半から1960年代中頃の家電ブームで、家電製品が急速に普及する。1956（昭和31）年には、電気洗濯機・電気冷蔵庫・電気掃除機が「三種の神器」と呼ばれ、庶民にとって憧れの家電製品であった。やがてテレビ（白黒）・洗濯機・冷蔵庫が「三種の神器」と呼ばれるようになる。

1967年に新潟県内では、テレビ（白黒）が97.8%、洗濯機が86.7%、冷蔵庫が77.8%の高普及率を示しており、これらはいずれも全国平均を上回っていた。これらの家電製品の普及によって、「家庭の主婦、とくに農村の主婦は過重な家庭内労働から解放された。洗濯機へ投げ込めばすぐ洗濯はできる。」ようになったのである（『両津市誌 下巻』715頁）。

こうした家庭内労働—家事労働—の変化を促したもう一つの要因として水道の普及があった。水道法が制定され、「国民皆水道」の方針が示されたのは1957（昭和32）年のことであった（嘉田由紀子等前掲書、16頁）。

久知河内集落に簡易水道が完成するのは1963（昭和38）年のことである。（『両津市誌 下巻』952頁、629～630頁）この簡易水道は、集落上流部にある複数の湧き水を水源として利用したものであった。また久知川上流部には、1985（昭和60）年に洪水の調節、農業用水の確保、上水道用水の補給を目的とする久知川ダムが完成した。これにより、久知河内でも1985年に上水道が建設され、翌1986年に久

表2 「三種の神器」の新潟県内における普及率（『両津市史 下巻』712頁）

（単位：％）

	1967年		1968年		1969年		1970年	
	新潟県	全国	新潟県	全国	新潟県	全国	新潟県	全国
テレビ（白黒）	97.8	96.2	97.8	96.4	97.8	95.3	94.4	90.2
電気洗濯機	86.7	79.8	90.6	84.8	90.0	88.7	93.3	91.4
電気冷蔵庫	77.8	69.7	85.0	77.6	89.4	85.2	87.2	89.1

知川浄水場が完成し、簡易水道に代わって、久知河内にも上水道の給水が始まった。簡易水道や上水道の普及によって、水汲みや水運び等の過重な家事労働から解放され、生活の快適さや利便さを農村生活でも享受できるようになった。

一方で、生活様式の近代化とともに、それまで濃密であった川と日常生活の関係が疎遠になっていくのが、高度経済成長期の日本の各地にみられた現象であったといわれる。川での洗濯、野菜洗いなどの姿は消えていく。日常生活と切り離された川への関心は徐々に薄れていくのだろう。家庭排水が川に注ぎ込むようになる。

更に、川との関係が疎遠になる契機は、水害から人々の生活や財産を守るために、洪水防止のための河川工事が進められたことである。

1967（昭和42）年から1968（昭和43）年に、久知川の護岸工事が行われた。1964～1966年にかけて、久知川が3年連続氾濫したことで、久知河内集落は水害の被害を受けた。この水害は、新潟県下越の関川流域で大きな被害をもたらした羽越水害の時と重なる。久知河内集落にある菊池茂雄さん宅も床上浸水し、5日間ほどを蔵の中で生活したという。これらの水害を受けての護岸工事であった。

当時の河川工事の考え方は、洪水となっても氾濫して水害をもたらすことのないように、上流の水を速やかに下流に流すというものであった。このため

に、久知川にも機械を入れ、川をならし、淵や瀬もなくした。また、洪水時でも氾濫することのないように堤防を高くした。それにより、写真4のような石積みの堤防から、写真1のようなコンクリートブロックで護岸を固め、また堤防を高くし、更にその上にコンクリートブロックを高く積み上げた現在の堤防に変わった。堤防が各家庭の庭よりも高くなった。人は川の中に簡単には入れないような構造となったのである。このような変化に関して、次のような住民の回想がある。（久知河内ホテルの会『昔からずっと、川とともに、久知河内』2003年3月、3頁）

—大雨が降り続き洪水になり、堤防が決壊、道路がなくなり、その後現在のようなブロック積み護岸になり堰もコンクリートで高くなり、魚も昇ってこなくなった。

かつて川は、自然の恵みをもたらすと同時に、ときに洪水による災害をもたらす恐ろしい存在であったが、流域の人々にとって「中心的な存在」であった（嘉田由紀子等 15頁）。そのような人々の日常生活に密着した「近い川」から、それからは切り離された「遠い川」への変化があった。久知河内集落の人々の日常生活における川との関わりも、そのような時代の流れの中にあったといえよう。